Taeko

平成 18 年 7 月 14 日、
テレビユー福島のイブニング６で、
妙子の特集が放映されました。
この放送のおかげで、
今まで知り合うはずもなかった方、
隣県、近県、遠方の方まで
ギャラリーを見に
足を運んでくださいました。
妙子の存在が少しでも
ひとの心に刻まれたことを、
とても嬉しく思います。

雪の下（油彩）

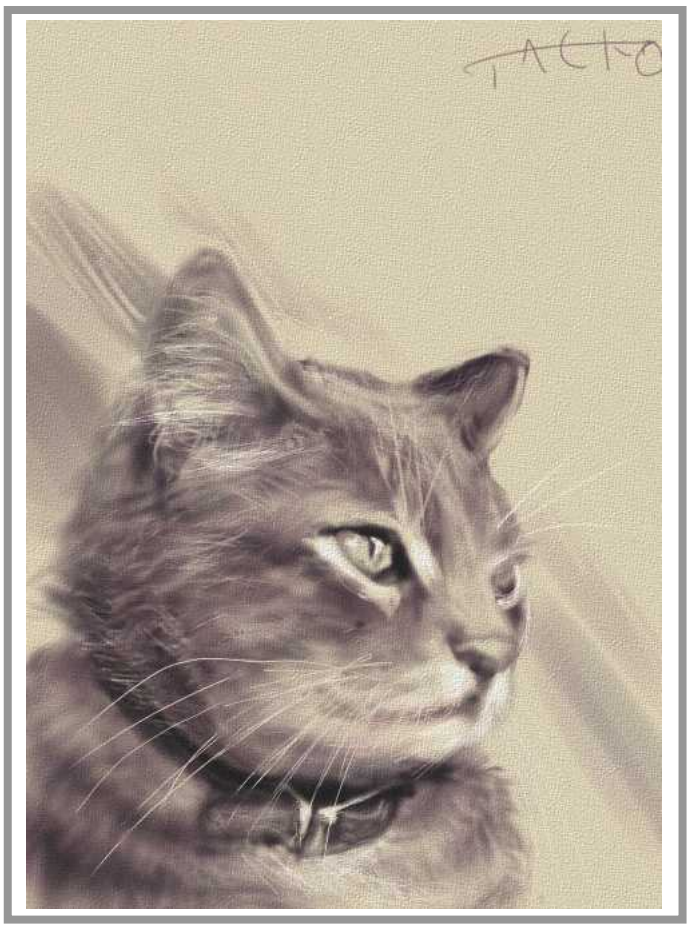
　妙子が逝って二年になろうとしています。
時の流れは、悲しみを癒してくれましたが、妙子の存在は、むしろより鮮明に強く私たち家族の心の中に刻まれました。何をするにも、どこへ行くにも、「妙ちゃんと一緒」という思いは、残された私たちへの妙子からの最大のプレゼントのような気がしています。
　妙子は大分前から、自分の短い人生を予感していたようです。書き残した文章や日記には、そんな妙子の秘められた思いを感じることができます。死の三年前に描いた自画像「雪の下」は、右手に刃に似たほおずきの枝を持った自分を描いています。背景には、血を思わせる赤、黒い服をまとった自分の顔を薄いブルーで塗りつぶしてあります。自分である黒と、赤、ブルーが、キャンバスの右に描かれている雪景色の彼方へ沈んでいます。サインもこの絵に限って二つ記されています。左下のサインは描く自分、右下のサインは天国からの妙子のメッセージのような気がしています。奇しくも妙子の死の翌日には初雪が舞い降り、
そこには妙子の旅立ちにふさわしい清らかな白い風景がありました。地上の汚れをかき消すように広がる雪景色が涙で霞んだことが昨日のことのように思い出されます。画家と言えるほどの妙子ではありませんでしたが、自分の死の風景を完璧なまでに描いた画家、妙子はすごいと思うのです。そんな妙ちゃんへの思いを込めてこの小冊子を作ってみました。
妙子のこと折にふれ思い出してくだされば、幸いです。

２００４年 6月 ２８日　デニーズにて

妙子の手に光る銀の指輪は
かすかに鈴の音がして
彼女のお気に入りでした。
この５ヶ月後、
指輪を私の机の上に置き
妙子は旅立ちました。

武蔵野美術大学　学園祭にて

Tae
2003


TACTO

もう　くよくよ　考えるのは、よそうと思う
考えたって　始まらないのだ。でも。いつも私は
くよくよくよくよつまらない事を考え、そしてくり返し、
 反省。また同じ事のくり返し。

この性格・・・
　だれに似たのだろう。

せめて死をすぐ考えない様になりたいなぁ
何かあると、すぐ「死のう」なんて・・・最低だ。

生きたいよ、
お母さんのために、お父さんのために、
愛する人のために、自分のために。
本当に、
この気持ちを忘れないようにしよう。

昔に帰りたい。心からそう思う。
自分は汚ない。あぁこう思うからすぐ
「死」など　思いつくんだ。

 でも、昔、すべてが美しく清らかで　自信に
満ちていて、すばらしかったあの頃に帰りたい。

今、世の中にある全てのすばらしく感じる物、
（思い出）から成っているんでは、なかろうか？

　ある一定の年令に達してしまうと、なんだか何にも
出会わないような気がする。
　自分の本当の自分の中からわいてくる感動。
楽しさなんて、今、味わう事ができるのかな。
昔、神や自然は、私の一部・・・では、ないが、
その中に私はとけ込めた。
　　でも今は、あまりにもはなれている。
他人にしても、それについては、私がひねくれて
しまったからかもしれないが、他人が話す事や、
やる事、またその存在さえ、味気なく意味のない
物に感じられる。しかし、また一方では、それは、
とても大きな存在で、私をおびやかしたり、笑わせたり、
とにかく自分より大切な物にもなる。
でも、それらは、結局自分しだいで、
それだけ自分が、不安定なのだ。
　いつからこんな風になったのか。
　１人で生きていくのが当然だったのに。
　どうしてこんなに弱くなったんだろう・・・
私が全てを思いだせれば、きっと、
こんな状態にしたのは、自分自身の罪であろう。
神から離れた、その時からくるっている。

もう一度、神のそばにいきたい。
許されたくてたまらないのだ。
そうしたらうまくゆく。　お母さんも幸せにできるし、
みんなも　幸せにできる。

私は　生きなければ。　勉強をしなければ。

田舎の時間に居たいなぁ。
夏の夜、　虫の声、　草の音、　夜の香り、　かとりせんこう、
いとこたちのふとん、　洋間からきこえる大人たちの声、笑い。
　あけはなった　しょうじ戸、　風、　風りん、
　あの夏の夜、　あの感じ、　日本の夏の感じ
　あー　行きたい、　花火もしたい。
でも今、行ってもきっと、掴みどころが
なくて、味気ない思いをするだけかもしれない。

だから子供の頃に帰って、田舎をまた味わいたいのだ。
あの時を、味わいたい。
　もしかして老人になったら本当に又、本当の
田舎の時に戻れるのかもしれない。

　だから今は、安心してくらすべきなのかな。

６　/　22　　ＰＭ　９：５７

今日は、デッサンコンクールがあったのだ。
まだ、未完成！　でも少しは、まん足できた。

長い間、勉強をしていないので
自分の中の空白がとても大きな物となって
しまった。今、家族と一緒だから
いいものの、聖書の、勉強をしなければ、
私は本当に、一人ぼっちになってしまう。
なんというか、ネタがないのだ。
　楽しみが　ない。　所有欲に欠ける。
自分の性格が、今頃になって問題だと
思う。小６の時の「未来の自分」の
作文で、「なにになりたいか？」と
いう、テーマを見て、すぐ「老人になり
たい」と思った。　周りには、これから、
人生の春、を向かえようとする、浮かれた
子供たちがたくさんいたにもかかわらず。

私が、今までの人生で、
本当に価値があると思ったのは、
猫の九里子、と、純粋な年より。と、
無邪気な、女と、クラシックのピアノ曲と、
天気と　自然と　花の信仰と
信仰を持つ人（ヘルマンヘッセの小説もある）
　　自分は、それを見てただけであり（聞いたり）
自分がそれに、なるとは思わなかった。
私は、ずっと見ていたかっただけで。
だから老人になりたかった。
なにも　求めないで、キレイな物を、見つめていたかった。

私は、　主人公になりたくない。

　本当は、罪にも、

　　善にも、

　　興味がない。

興味のある、ふりをして、

生きているのは、苦しい。

美しい物はつかまえておく

　事ができないからだ。

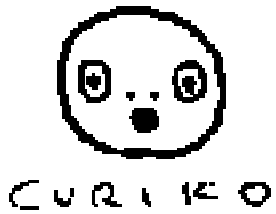
聖書を読む事くらいしか、

私を　安心させるものは

　　ないのだ。

それがないと、私はただの

罪人で、悪のかたまりだからだ。



魚について全てを知ってる人がいる。
その人は漁師だったか、学者だったか、
分からないけども、とにかく全部
知っているという
（骨の作りだとか肉の色だとかどんな味だとか）
でも　その人は魚ではないので、水の中を泳ぐとき、
どんなニオイがするか、その時、ピカピカのうろこが
どんなふうに感じるか、えらにひっかかる水の流れは、
どんなふうか、全く分からない。
だから魚にとっては、自分を見つめる人の人生など
知ったこっちゃないのだ。

マーガレットの花びらに
知り合った人たちの名を全て書き写して
夜中の 12 時に全部食べちゃうんだ。
朝　起きると　私は人ではない
カフカの毛虫みたいな　かたまりに
なって　ななめにろーかを見る。
　窓も柱も全部　横になってる。
　ああ、　　満足したい。

意外と沢山の事が、意外と
心の中に　つまってて、安心できない。
心から、　ある日は、全部手に
入れたかの様に感じて、幸せ
だった。　自分の足取りも自覚
できたし、なく理由もはっきり
分かってたし、酒をのめば、
変わる様になっていたし、
　　それが今は　何もかも
分かりすぎていて、しかも
それが　はっきりと、頭の中に
それぞれ　収まっていて、目が
はなせない、つまらない事と
笑えれば、又、昔に戻れるのにな。

勉強　ずっとしてないから
勉強しよう。
１４才からしてないから
１５年、あと
勉強すれば
普通になる

たくさんの　時間が　山程あるんだが、
たくさんの人の分の時間があるだけで、
自分の分は、もう、ちょっと・・・。となりと同じカオ
をして、のんびり歩いているが、ある日、
そのカオがずいぶん違っていると思う。
たぶん病院のトイレの鏡の中
　　それから　ある日、時計が急に動かなくなって、
「ここまでです」と声がかかる。
　その時とはどんなだろう。
「たくさん時間があったわけじゃなかった。」
「あれは、他人の物だった。」
「私は、時間を捨ててしまった。」

自分の分は　もう　ないのである。

それとも自分が終わりなんではなくて、
他人事だと思うかな。
鏡も、床も、白いろうかも、真白で、
手も足もカオも自分のではなくなるかもしれない。
そして誰か　似た人を見ると、
「あなたに私の時間をゆずりたいんですが」
といって、
全部止めてしまおうとするのか、
「ここまでです」と言われたら、顔だけは
笑っていたいもんだ。

私は　あなたに　会いたくて、
ずっとずっと登ってきた。
幸わせな　窓を　何コも過ぎて
ねずみのむらがる階段を
ただ　登ってきた。
沢山の人の　忠告も無視して
ただ　ここまで来たんだ。
時々　私を刺し通す様な
人の言葉と、人殺しの夢を
くり返し味わって、
時々　まだ　一歩も進んでないとか
何て遠くまで来たのだろう？　とか
つぶやいて
心の中の泡だちが　消えるまで
続けようと思っていたよ。
でも　高い所にいる人が
私の　首ねっこをつかんだんだ。
うつうつの　重なる　森の中で
死人の様に　動けない私を
見つけたんだ。
そして　本当の光を見せてあげようと
私に言った。
地平線ににじむ朝の光を
永遠を信じることの出来る若い精神を
私の手に　持たせるために。

お酒　飲んだ訳でもないのに

光が　私の目の前におりてきて

あいさつするよ。私の全ての思い出に。

こんな日に　消えるのはいい気分。

最初からやりなおす気分。

誰も　私をしらないんだ。

　雲の上に誰かいるとしたら、

朝の地平線の光を私に見せてよ。

私がとなりにいる事を　思い出して。

「君はだめだから」　なんて言わないでよ。

もうずい分立派に年も取ったんだ。

自分の健康さをのろって

黒を着て、死を顔にぬりたくる

子供ではない。

自分の健康さをのろい

自分の体に刀をつき立てた、

少しでも自分を愛そうとして

死をまとい　カオにぬりたくった。

あの頃の　自分はもう

どこにもいない。

窓の外に　まだ半分だった頃の自分を

探して　遠く空を　さまよう。

おねがいです。

誰か　そこに

　ほんとうにいるのなら・・・

自分で自分の人生決めなきゃ意味ない。

本当だ。　私は猫じゃないし、
犬じゃないし　捨てられた　飼いなんとかじゃないし
間違ってつかまった鳥じゃないので
本当はどこへでも飛んでいけるのだ。
自分がした失敗が気になるのなら
帳消しにする何かをすればいいのだ。
（2004年　1月16日　金曜日）

誕生日に　赤ワインを開けよう。
それに合う料理も…
猫のイラストは未だに描けない。　でも
自分のＨＰの予定だけが頭の中に
くり返される。（絵のイメージも…）

もうすぐ　もうすぐ　始めよう！
（2004年　2月5日　木曜日）

80
NEKOBAYASHI
TOKYO

NIPPON
12.12.12
50
8 - 12

⇒

NIPPON
60
茄子
田島郵便
クウさんとAsh

どーする ー?
やっぱ あそこ
しよっ?

妙子ちゃんへ

最後に会ったのは6～7年前。 最後に話をしたのは昨年のことだったと思う。
自分のことばかりで、元気でいるだろうと思って手紙もTELも何もしなくてごめん。
いつか、「恵子ちゃんは私が落ち込んでいると不思議とTELをくれるんだよ」と
言っていたけれど、今年に入ってからは私たちのそんな不思議なつながりもなく、
いつかまた会える日をただ楽しみにしているだけだった。
いつかまた行こうと言っていた場所へ、もう一緒に行けないなんてすごく悲しい。
上野の美術館、鷹の台駅から学校までの上水通り、借りていたアパート、宮崎にも
遊びに来てほしかった。
心からの友達を失って、また自分を理解し、共通の楽しみを話したり、バカ話で盛り
上がれる、そんな友人がまたできるのだろうか、と、とても心細い。 無表情と言わ
れていた私のことを、 「目の表情が豊かだ。 恵子ちゃんの目を見ればどんな気
持か分かる」 と言ってくれたのは妙子ちゃんだけだった。 人に対して深い観察力
と洞察力を持っていたね。 心の目が良すぎて、自分に対する周囲の目、特に悪意
や屈辱を敏感に感じとり、人一倍気疲れし、思い悩んでいたよね。

宗教の本にどう書いてあろうと、妙子ちゃんは地獄なんかに行かせないよ。

私はみんな同じ所に行くはずだと信じているから、大好きな神様の所へ行ける
よう、祈っている。

私は妙子ちゃんほど繊細じゃないから、善も悪も折り合いをつけて、ず太く生き
ていくよ。 私は確かに偽善者呼ばわりされてもハイそうですよと言えるし、
かえって頭にくるけれども、妙子ちゃんは人からそう言われたことが 2 度あって、
ひどいショックを受けたことを話していたね。 そんなことないよ。 それにそんな
ことを人に言える人間がどれだけいるだろう。
出会った頃から、自分を過小評価する妙子ちゃんが不思議で、気の毒で、腹が立つ時
もあった。 そんな風に自分の事を言うのはやめなよ、と言っても、何かが妙子ちゃん

を、そうさせてたみたいだ。 生い立ちを何度も聞かせてくれたけれど、それにおける影響はあるにしても、自分の力に気付いてほしかった。 良い評価をありのままに受け止めてほしかった。 ほんの少しの自信が、妙子ちゃんを大きくしたことだろう。

一緒に過ごした時間で得たものは大きい。 いつでも私を泊めてくれて、悩みを聞いてくれたこともあった。 自由な考えや行動に、天才的な物を感じていた。泊めてもらうと、不思議とホッとして、私は安眠できた。 1 度きりの大ゲンカ（？）も、お互いあやまって、仲良しに戻れた。 そんなことができたのは妙子ちゃんだけだった。 とにかく私達は相性が良かった。 遠くに住んでいても、年に1 度の賀状のやりとりとたまの電話でも充分通じあえていた。 でも今年はそれもなく、元気かなと思うだけで連絡をしなかったのが心残りでならない。

私のことを考える間もなく、たぶんひたすらそうしたくて逝ってしまったのかもしれないね。 少しは楽になれたかな…？ でも、私のことを最後に考えたのはいつか、今はもう遅いけどそれがいつなのかとても知りたい。 私が何の知らせもしないから、疎遠になったと嘆いていたかもしれないね。 妙子ちゃんの顔や声はいつでも頭の中で見たり聞いたりできるのに、もう実際に会うことができないなんてさびしい。

いつかあの世で会えるまで、

待っていてほしい。

そしてまたバカ話で笑い合いたい

津江　恵子

たえ子ちゃんへ

たえちゃん、けんかをして会わなくなって、何年たつかな？

もう、十年以上になるね。　あの最後の大ゲンカの後、たえちゃんに申し訳ない気持ちと、自分があまりにもふ甲斐なくて、そんな自分を見せたくなかったから、私からは連絡しなかった。　でも、2年くらいたった時、たえちゃんが電話してくれた時は本当に嬉しかった。　電話で分からなかったかもしれないけど、本当に本当に嬉しかった。　いきなり　「クッパの作り方教えて」　って内容にびっくりしたけれど何だかたえちゃんらしいなと思ったよ。　この電話の時に、連絡をとっていない間の話を、おもしろおかしく話してくれたよね。

あの時、たえちゃんは私の事を許してくれたのかな。　悪いのは私の方なのに、焼肉の話では逆にたえちゃんの方から謝ってくれて。　私の方が、ちゃんと謝っておきたかった。　その時は“ごめんね”って言ったけど、今、ちゃんと「ごめんなさい」を伝えたいんだよ。　私はたえちゃんにとって良い友人ではなかった。　それでもたえちゃんは、　「敦ちゃんがすこしずつ良くなっているのを見たいから」　と私と一緒にいてくれた。　でも一緒にいる間は、良い方に変わっていく私を、たえちゃんに見せることができなかった。

あんなにたくさんの時間を一緒に過したのにね。　一緒にいる時間が長いぶん、けんかも度々したよね。　その度に私の悪い所をはっきり指摘してくれたことが、今の私にとってとても大切な事となっているよ。　今の友人、知人と良好なおつきあいができているのは、たえちゃんの言葉のおかげだよ。　高校を卒業するまで、私の性格上の問題点をはっきり指摘する人はいなかったし、何かあってもうやむやに流していく関係ばかり。　だから、当時はたえちゃんの指摘することがなかなか理解できなくて、つらくて泣いたりしてたんだよね。

絶交しても、たえちゃんから連絡をくれるから、私は少し甘えてたんだと思う。

久しぶりの連絡も、やっぱりたえちゃんからの電話だった。　本当にありがとう。

ずっとたえちゃんと話がしたかったから嬉しかった。　それでも、前の様に
すぐに電話をかけたりする事はできなかった。　距離もあったけど、
たえちゃんに　「私、すこしは成長したでしょう」　ってところを見せたかった。
でも、仕事とか、育児とか、いろんな事で落ち込んで劣等感の塊になっていて、
たえちゃんに会わせる顔がなかった。
ずっと会いに行きたかったけど、悩みをこぼせば、また前の様にたえちゃんを
困らせてしまうから、　電話をするなら　元気で明るい自分がいい、　そう
思っていた。　引越しの手紙を出す度、年賀状を書く度、　少しでも成長して
いつかたえちゃんに会いに行こうと思っていた。
たえちゃんは私に、　「一緒にいるのは、あっちゃんを利用してるだけなんだ。」
と言ったことがあるけど、　たえちゃんが本当にそう思っていたとしても、
それでも私はかまわないよ。　あれだけ助言してくれて、一緒に楽しい時間を
過ごせる事ができたのは、たえちゃんの気づかいがあったからだよ。　私は
たえちゃんを尊敬していたし、頭が良くて、話が上手で、すごく羨ましかった。
だから、一緒にいられただけで充分だった。　それだから、私の方から何も
してあがれられなかった事が悔やまれてならない。
あの最後のケンカをした日、落ち込む私を気づかって、話をずっと聞いてくれて、
何もしない私に夕ご飯までつくってくれたのに、私は泣いてばかりだった。
たえちゃんが　「もう、つきあいきれない」　と言ったのは当然の事で、
たえちゃんの気持ちを考えてあげなかった自分を嫌悪している。　ずっと、
そうだった。
考え方が変わったのは、　今年の夏。
私はこの日、あのけんかをした日の様に落ち込んでいて、　何だかメソメソしてて、
自分が独りでみじめで、　なさけなくて。　けんかの事を思い出した。
このけんかの事は今までも何度も思い出してたけど、　今回は、違った。

たえちゃんは、あの日、私のそばにいてくれた。

私を独りにしなかった。　私をほっておかずに、そばにいてくれた。

たえちゃん、ごめんなさい、　そのたえちゃんの優しさにいま、やっと気付いた。

私は、　あの時独りではなかったという事を。　そう思ったら、　たえちゃんの

笑った顔がぱっと浮かんだ。　たえちゃんがそばに来てくれたのかな。

たえちゃん、大切な事に気付かせてくれてありがとう。　力をくれてありがとう。

もう、絶対に「独り」だなんて思わないから。

これからは背中を押してもらわなくてもいいようにがんばるよ。　自分のこと

ばかりじゃなくて、周りにいる人達にも気づかえる人間になる様　努力するよ。

たえちゃん、どうぞ見守っていてください。

たえちゃん、本当にありがとう。

飯村　敦子

妙子　初めての海外旅行　　ロサンゼルスにて

2002年度　年賀状

のんべいさん
いらっしゃい

つげ
ました。

妙子が大好きだったふくろう

留さんの横顔（描画年不詳）

妹　～　愛ちゃん

静物　～　花と果物のある風景

ギャラリーねこ林オープンに寄せて

ねこが愛らしく手招きする素敵なギャラリー

こどもの頃のあなたが優しく語りかけてくる

ばくはつするようなエネルギッシュな作品には

やさしい猫の絵からは想像もつかない

　　あなたの秘められた

　　絵に対する情熱がほとばしる

しずかなギャラリーには

　　確かにあなたの息づかいが感じられる

平成 17 年 10 月 23 日

鈴木　洋

小林　妙子さんに捧ぐ

こっちにおいでよ

　おいしいごはんとあったかな寝床も用意してあるよ

ばすえの盛り場の路地の奥

　　顔を半分だけ出してこっちを見ている猫に

やさしく声をかけている君の姿が目に浮かぶ

しのつく雨の夜は

　　ねぐらのない猫たちを想い

　　眠れぬ夜もあったかもしれないね

たにんごとではすまされなかったのは

　　あなたはすべての弱い者に対する

　　慈愛の心があったからだと私は思う

えがおの向こう側で

　　君は抱えきれないほどの孤独と闘っていたんだね

こんなにも愛情の伝わる猫の絵を描けたのは

　　自分の中にある野良猫の哀しみを知っていたためだろうか

　　君の絵の猫はみんな人なつっこく笑って見える

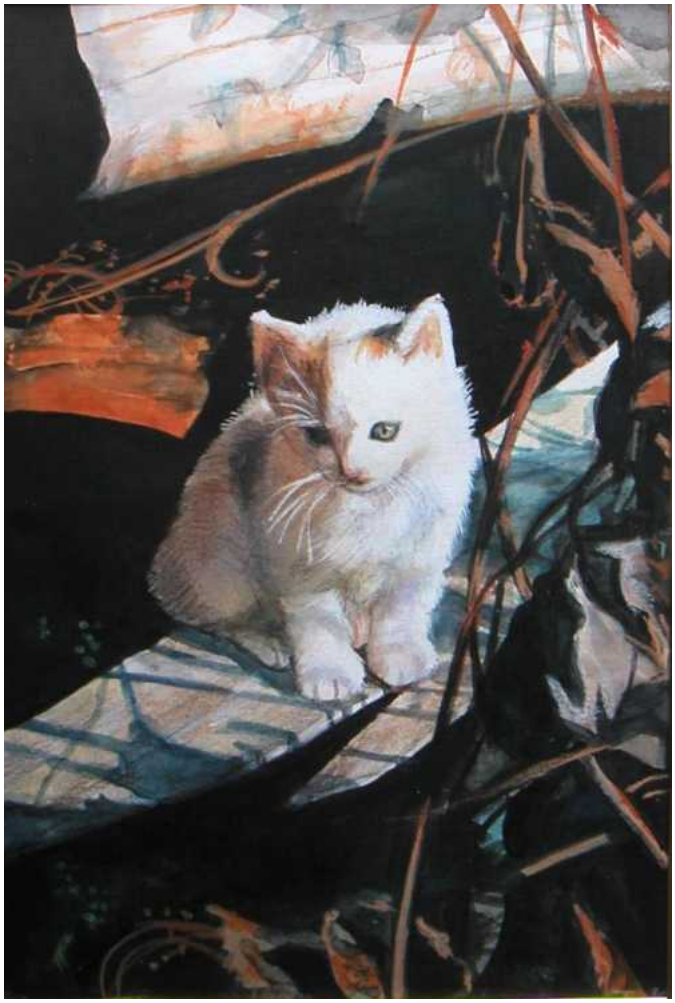
平成 17 年 10 月 28 日

鈴木　洋

Tae
2003

Tae
2002

TAE
2007

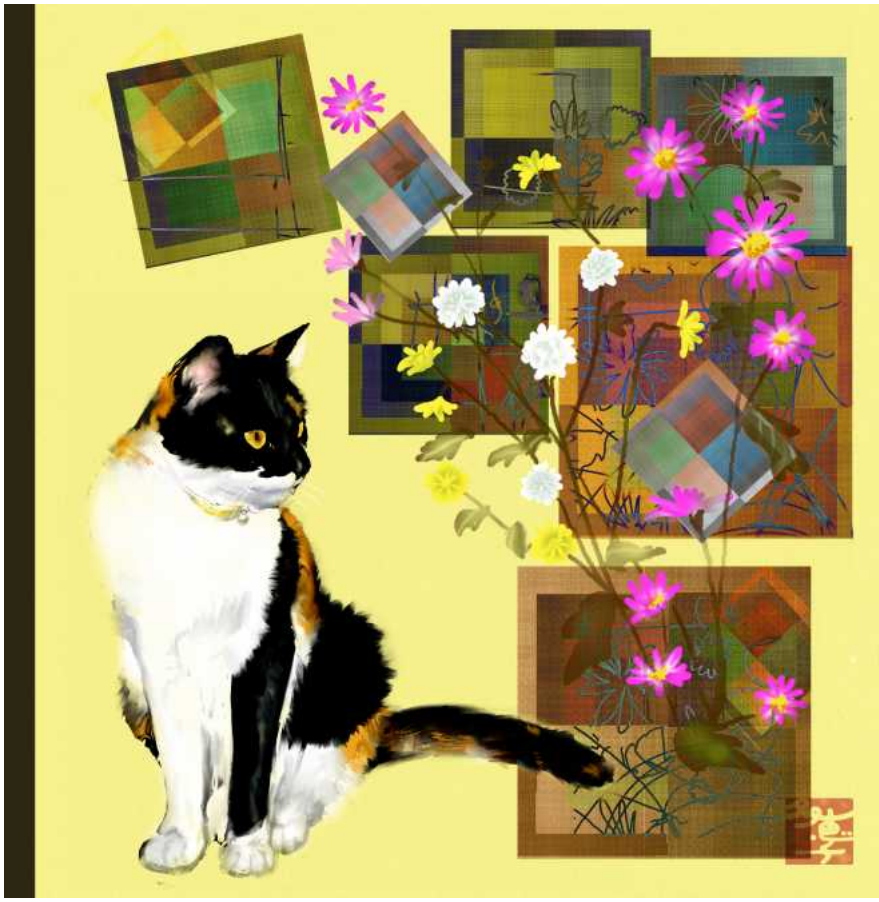


陽だまり（水彩）

花とブーニン（水彩）

花と猫（水彩）

花のシンフォニー（水彩）



トリンと菊

Trinity's World

自画像（油絵・最後の作品）

編集後記

こうして冊子を編集するにあたって妙ちゃんの絵を探してゆくと本当に膨大な数になる。妙ちゃんは生前、後期の頃は主にパソコンで絵を描き、保存していた。開けるファイルは全て開いたつもりだが、もしかしたら眠っている絵がまだ他にもあるかもしれない。
小さい頃から優しくて、絵が上手だった妙ちゃん、大好きだった。妙ちゃんと一緒に絵を描くのが楽しくて仕方なかった。恥ずかしながら「小嶋妙実」（小林妙子＋中嶋久実）というペンネームを作り沢山の少女漫画を共同制作した。音楽やその他も何か好きになるきっかけをくれるのはいつも妙ちゃんだった。私の今の趣味・嗜好は妙ちゃんがいたからと言っても過言ではない。夜の学校の校庭で私と私の妹と三人で変な創作ダンスを踊って皆で腹がよじれるほど笑ったり、夜中、布団の上で懐中電灯で顔を照らしながら物まねで一晩中歌ったり、妙ちゃんとの思い出は思わず吹きだしてしまうような面白いことばかり。妙ちゃんを思い出すときはいつもあの天真爛漫な笑顔が浮かぶ。
超人的とも言える位に想像力豊かだった妙ちゃん、まだ幼稚園、小学生位であろう頃の絵は、現在大人の私でも真似できない表現力で独自の「メルヘンワールド」をえがいている。キャラクター、構図、色使い、どれをとってもプロのイラストレーター顔負けと言っても良い位のストーリー性の高いもので、人物や動物、そして植物までもがその世界で生き生きと動いている。背景も平凡な頭では思い浮かばない、摩訶不思議な世界なのだ。
ここまで描けたのは、妙ちゃんは実際にメルヘンワールドに住んでいたからじゃないかと思う。概して子供は想像力豊かだが、妙ちゃんはちょっと違う。この世界に生きながら、いつも私たちとは違うところに住んでいた。花を見るとき、虫を見るとき、空や雲、水を見るとき、もしかすると妙ちゃんだけには違う何かが見えていたのかも知れない。大抵の人間は大人になるにつれ、現実の世界に揉まれて汚い自分と否が応でも対峙しなければならずそんな想像力はなくなっていくのだが、妙ちゃんの場合は大人になってもその世界にいたのだと思う。別の言い方をすれば、その汚い現実の世界が見えなかった、もしくは意識的に見るのが嫌で見なかったのだろう。現実の世界で生きるのは妙ちゃんにとっては辛いものでしかなかったのだ、と思う。きっと、今は妙ちゃん自身のメルヘンワールドで楽しく空でも飛んでいるのではないかと、私は想像する。その方が、妙ちゃんらしい。

知識が豊富で才能もあるのに、決して人を見下す態度が無かった、妙ちゃん。　少しはにかむように優しく笑うこの写真は、そんな妙ちゃんの謙虚さが伝わってくる。

最後に、この冊子を作るにあたりご協力くださった皆様に、心より御礼申し上げます。
ご友人のお寄せくださった文章は、一部、本人の許可を得て校正、加筆部分がありますことをここに記しておきます。
妙子本人の詩や文などは、本人らしさが失われないよう改行、漢字、送り仮名などは、そのまま写しております。

平成18年（2006年）11月
従姉妹　中嶋 久実

日 sunday　　2004　　天気　　気温

夜　空を見たら、月のまわりに大きな
虹の輪が出来てた。

しかも頭の真上！

すごくうれしかった。
神に感謝した。

発行者：小林康乃
〒967-0004
福島県南会津郡南会津町中町甲３９５３
TEL　０２４１－６２－１１２３

Memories of Taeko